



“笑顔”つなぐ
はままつのユニバーサル農業

農業と福祉のいい関係



浜松市産業部農業水産課
静岡県浜松市中区元城町103-2 Tel 053-457-2333
E-mail / nousui@city.hamamatsu.shizuoka.jp

(第2版・発行:平成30年10月)

ユニバーサル農業

ユニバーサル農業とは、一般的には、「園芸福祉」や「園芸療法」として知られている、園芸作業を行うことによる生きがいづくりや高齢者・障がい者の社会参加などの効用を、農作業の改善や農業の多様な担い手の育成などに活かしていこうという取り組みです。

近年、農業分野における担い手不足と、福祉分野における障がい者の職域開拓・雇用促進をマッチングする『農福連携』の取り組みが全国的に広がっています。浜松市では、平成17年度より浜松市ユニバーサル農業研究会を発足し、様々な連携のモデルが生まれてきました。

「"笑顔つなぐ"はままつのユニバーサル農業」は、福祉、企業、医療など、様々な立場での農福連携に関わる研究会メンバーの活動をインタビュー形式で紹介しています。

京丸園株式会社 鈴木厚志	1
障害福祉サービス所・だんだん 金田祥史・和田里美	5
株式会社ひなり(特例子会社) 中島昌博	9
スズキ果物農園 鈴木隆広	13
聖隷クリストファー大学 建木健	17
まるたか農園 鈴木崇司	21
社会保険労務士法人リアランス 鈴木泰子	25
takayamarose 高山隆	29
一般社団法人ノーマポート 高草志郎	33
ホットファーム株式会社 梅林泰彦	37
板橋工機株式会社 河合浩史	41
株式会社カクト・ロコ 野末信子	45
野沢園 野沢登与次	49

“笑顔”つなぐ

はままつの

ユニバーサル農業

京丸園株式会社

鈴木厚志



上：中にブラシを備えトレーを入れることで洗浄できるよう製作した機械
下：現在はさらに改良を加えたより効率的な洗浄機械も稼働している

profile

京丸園株式会社代表取締役、NPO しずおかユニバーサル園芸ネットワーク事務局長。平成9年から障がい者雇用をはじめ、現在ユニバーサル農園として障がい者24名を雇用する。芽ねぎ、姫みつば、姫ちんげん等オリジナル商品をJAとびあ浜松、静岡経済連を通して全国40市場に周年出荷している。

■ユニバーサル農園・京丸園のはじまり

京丸園は芽ねぎやチンゲンサイ、ミツバなどを栽培している農業生産法人で、現在74人の従業員のうち、24人が障がい者のスタッフです。経営理念は「笑顔創造」。農業を通じて笑顔を創造し、従業員さん、お客様の心と体の健康を応援する農園を目指しています。

私たちが、精神や身体などに障がいを持った方を雇うきっかけになったのは、規模拡大のために求人を出した時のことでした。ある日、障がいを持った子とそのお母さんが来られて、農園で働かせてほしいとおっしゃいました。その時の私は、障がいのある方に農業は無理だろうと思ってお断りしたのですが、「給料はいらないから働かせてほしい」と必死にお話しされお母さんにおされ、1週間だけ

農作業体験として受け入れることにしました。

その時の「給料はいらないから働かせてほしい」という言葉は、しばらく私の頭から離れませんでした。当時の私は、仕事はお金を稼ぐためにするものだと思い込んでいたので、その真意が理解できなかったのです。その後、福祉施設に勤める知人にその話をすると、「障がい者を雇い入れる企業はまだまだ少なく、就職ができなかった方は福祉施設に行くことになる。福祉施設に行くことは面倒を見もらう立場になり、働きの場に身を置くこととは違うのです。」と、障がい者の実情を教えてくださいました。働くのはお金を稼ぐためだとは思っていなかった自分が恥ずかしくなると同時に、私たちの農業が福祉の役に立つのではないかと思い始めたきっかけとなりました。

農作業体験として受け入れ後、しばらくすると農園に変化が生まれました。健常者の従業員がその子を助けるようになり、コミュニケーションが生まれ、職場の雰囲気明るくなりました。そして、障がい者のできる作業を受け入れ側が考えていくことで、農業経営に大きな変化が生まれてきたのです。

■障がい者を受け入れて、はじめて認識できた農業の弱点

障がいのある方を受け入れたことが、大きな気づきにつながった出来事がありました。

あるとき、特別支援学校の生徒さんの実習を受け入れることになったのですが、いきなり野菜の生産に携わるのは難しいと思い、トレー洗いの仕事をお願いすることにしました。私は、「このトレーをきれいに洗ってください」と作業を頼み、1時間後に戻ってみると、その生徒さんは最初に手にしたトレーをずっと洗い続けていました。洗ってもらいたいトレーはまだ数百枚もあるのに…、そう思

い私はすぐに先生に連絡し「この子に作業はできませんよ」と苦情を伝えました。すると、先生から「あなたはどんな作業指示をしましたか？」と聞かれたのです。私は、「トレーをきれいに洗ってください」としっかりと指示しましたよ」と伝えると、「そんな指示の出し方をするから生徒が迷うのです。そんな抽象的な作業指示を出しているから農業が衰退するのです。」と反対にお叱りを受けたのです。

私は、その時はと気が付きませんでした。たしかに、農家の人たちは、水かけ作業の指示も「苗にちよっと水かけといて」とよく言います。作業指示は具体的にでなければ、誰も作業を手伝ってられません。私たちの農業現場には抽象的な言葉が飛び交っている、後継者が育ちにくい状況にあるのだと認識した出来事でした。障がい者に農業現場に来ていただいてはじめて、農業という産業の特殊さが自分の中で明らかになったのです。

この先生の一言から、ブラシを回転させ、そこにトレーを入れ、上下に2回と指示できる機械を製作しました。その結果、作業精度が均一で、作業スピードは手洗いの2倍となりました。



左：手際よく出荷調整作業を行うスタッフ。
右：プレート一枚を使うことで誰でも均一な作業が可能となった。



ハウス内の虫を吸いとる虫取り機。ゆっくりと障がいのある方のペースで動かすことで、効果を発揮する。



総務部長を務める妻・緑さんとともに、ユニバーサル農園の経営を行う

■福祉分野から学んだ「作業分解」の視点

農園で起こった出来事をもう一つ紹介します。

ある日、特別支援学校の先生が農園の視察に来て、そこで行っていた芽ねぎの定植作業を障がいの生徒にやらせてほしいと言われました。芽ねぎの定植作業というのは、パネルに対して水平に、そして素早く作業しなくてはならないもので、健常者の中でも特に器用な人が行う、いわば「職人の仕事」でした。この仕事は障がいの者では無理だろうと私は判断し、そうお伝えしました。ところが、特別支援学校の先生は学校にあった下敷きを持ってきて「こうすればうちの生徒でもできます」と、これを使い職人たちよりもきれいはやく定植してみせたのです。

農業では、種まきから収穫まで、すべて一人でできて一人前。職人にならなければいけないと私たちは教わってきました。しかし、福祉の方々は最初から一人でやろうとは考えません。作業を切り分けてみんなで誰ができるようにする「作業分解」の視点で仕事を考えます。また、仕事に人を当ては

めるのではなく、目の前にいる人がどうやったらできるようなになるか作業のやり方を工夫したり、治具や機械化を考えます。仕事に人を当てはめる考え方は、仕事や作業のやり方に変化はおきない。障がいの者が働けるように、仕事や作業を根本から考え直すことが、農業に変化をもたらすのだ。そう気づかされた出来事でした。

■「心耕部」で、農業をユニバーサルデザイン

当園が障がいのある方をはじめめて雇ったのが約二十年前。その後、毎年1名ずつの障がいの者を雇ってきました。現在、社内には土耕部と水耕部、それから「心耕部」という部署を設けています。この心耕部に障がいの者は所属し、生産部署で仕事をしています。

健常者の従業員には、採用が決まると、会社は「この仕事をお願いします」と依頼します。しかし、心耕部に所属すると、「あなたはどんな働き方をしたいですか」と会社は本人の要望を聞くという体制をとっています。障がいの者が農園で働くことができるように会社が

農作業形態、仕組みを変えているのです。なぜそんな面倒なことをするのかと、疑問に思う方もいるかもしれませんが、ユニバーサルデザインの考えの基本は、「人」です。作業する人を中心にデザインしていくことで、私たちは新たな作業方法やビジネスの誕生を狙っているのです。障がいの者が一人、農園にやってくると、農園の中に変化が起こり、新たなものが一つ誕生する。この構造は、既存の農業を業を変革していくキーワードとなります。

また、あくまで農業という産業

（ビジネス）が核であることを忘れてはいけません。障がいの者や福祉が、産業の中で負担となるのではなく、プラスとなるデザイン。それをみんなで作り上げていくことが、これからの社会でも重要になっていくと思っています。

“笑顔”つなぐ

はままつの

ユニバーサル農業

障害福祉サービス所・だんだん

金田祥史
和田里美



上：施設内の訓練のひとつとして、縫製作業などを行っている。

下：スタッフが一緒に農場を訪れ、指示をしながら農作業を行う。

profile

だんだん
医療法人社団至空会が運営する障害福祉サービス事業所。多機能型事業所として就労移行支援、就労継続支援B型、生活介護、生活訓練などその他の様々な福祉サービスを行う。

金田祥史（写真左）
精神保健福祉士・社会福祉士・介護支援専門員。だんだんの管理者として施設長を務める。

和田里美（写真右）
精神保健福祉士。だんだんの就労支援員として様々な事業に携わる。

■だんだんでの農作業のはじまり

金田：障害福祉サービス事業所「だんだん」は、障がいを持った方の生活や就労の支援を行う福祉施設です。精神科クリニックなどを運営する医療法人社団・至空会が母体であり、就労移行支援や生活訓練など障がい者支援に関する様々な事業を行っています。ここ数年で法律も大きく変わり、障がいのある方がどんどん自立して社会に出ていこうという機運も高まって事業も多様となってきました。

和田：だんだんには、毎日35名ほどの施設利用者さんが通所されていて、現在製菓や縫製などいろいろな作業を行っています。そのうちのひとつに農作業があります。農作業をやらせてもらうようになったのは15年程前になるかと

さんを車に乗せて小グループで現場に行き、依頼された作業をスタッフが指示しながらみんなで一緒に行うという形で取り組んでいきます。農家さんから「助かるよ」という嬉しい声もいただけるのですが、私たちにとても農業に関わらせていただくことで得られる皆さんの良い面がありました。

■農業に携わって知った 皆さんのメリット

和田：屋外での作業というのはあまりなかったこともあって、始めたところから農作業は利用者さんたちにとっても人気のある作業でした。利用者さんは福祉施設によって特徴がありますが、だんだんには精神に障がいを持った方が比較的多くおられます。なかなか外に出られない人、引きこもっていた人などをイメージしていただければ分かりやすいかと思いますが、そういった方が生活リズムを立て直したり、コミュニケーションの不安を取り除いたりといった目的で訓練を行い、経験を積んでいき作業と比べて広い空間で適度な

思います。利用者さんから「働きたい」という声が非常に多い中で、当時は病院の清掃などをスタッフの個人的なツテでさせていただいていたのですが、なかなか長くは続かないという状態でした。三方原台地にあるだんだんの周りには畑がたくさんありますので、農家さんに「草取りなどの作業があればぜひ手伝わせて欲しい」と飛び込みで伺い、スタッフが2、3人の利用者さんを連れて農家さんにお手伝いに行くようになりました。

金田：こちらからお願ひしてはじまった農作業でしたが、農家さんからの評判も良く、話を聞いた他の農家さんからも頼まれるなど、次第にたくさんの農家さんをまわらせていただくようになりました。現在では収穫や芽かき、ポットの植え替えなど色々な作業を受託しています。スタッフが利用者

距離感があるので、対人の緊張感や、作業に対するプレッシャーなどが和らぐ部分が大いだと思います。それに、やっぱり自然の中の作業は気持ちがいいですよ。

金田：農作業は開放的ですよ。適度な連帯感の中で、適度に気を抜くこともできるという環境がとてもいい面だと思います。また、生活リズムを作るといってもすごくいい効果があります。身体を動かして外仕事ですから、作業後は適度に疲れます。そうすると夜よく眠れますし、食欲も出ると身体的にも、精神的にも、良い循環が生まれるんです。

和田：それから農業にはすごく達成感があります。例えばミカンの収穫などでは、ひとつの木から全部を収穫するという。それがすごく気持ち良く、自分でやり遂げたという感じることができる。それが他の作業だとなかなかない部分だったりします。

■農家さんとの信頼関係 の中で生まれた変化

金田：農家さんとの間に少しずつ変化が生まれてきたこともあり



左：地域産「遠州綿紬」を使ったオリジナル商品の制作なども利用者が分担して行う。
右：バラの芽かきを行う施設利用者とスタッフ。適度な連帯感が生まれるのも農業の持つ特徴。



自然の中で開放感を感じられる農作業は、施設利用者にとって良い循環を生む。



北区・三幸町にあるだんだんは三方原台地のため、まわりに畑が多い。

できます。
金田「福祉事業所として仕事を請けているものはたくさんありますが、届いた原料を使って施設内で物を作るといった業務とは違って、農業はこの地域の方々との接点になっていくんです。やもすると地域の中で孤立した事業所になってしまいかねない私たちにあって、農業は地域との大切な橋渡しを担ってくれています。
和田「自然と関わること、人と関わることで、今まで外に出られなかった利用者さんがはつらつと働けるようになるケースもあつ

て、そんな姿を見ると本当に良かったとスタッフ共々感じています。今後も地域の農業の中で、私たちが良い役割を果たせていければと思います。

ます。農作業に何度か伺ううちに、農場の方で少し工夫をしてきてくれたことが出てきたのです。
和田「以前伺ったたまねぎ農家さんでは、専用の器具でたまねぎの茎の部分をカットする際、手を切らないようにと鎌の先の部分に色テープを貼ってつけていました。少し心配をしていた作業ではあったのですが、おかげで怪我をした人はだれもいませんでした。
また、ある花農家さんでは苗を一定の長さに切るために、目安になる棒を用意してくれていました。このくらいの長さ、と言われるとなかなか難しいのですが、「この棒に添えてここで切る」というシンプルな指示になるととても理解がしやすいのです。その後、他のパートさんも同じ棒を使い作業がしやすくなったということでした。
金田「農家さんにとっては、障がいのある方のことを思いやってくれていることなのですが、それが効率の良い作業につながり、結果として同じ時間でもたくさん成果をあげることができるよう。単に業務のやりとりをしているだけでは生まれなかった変化が、農家さんと利用者さんが一緒になって作業することで生まれる。まさにユ

ニバーサル農業につながっていることなんですよね。
和田「障がいのある方のことを農家さんが理解してくれて、作業しやすい方法を見出ししてくれる。私たちの意見も尊重していただき、コミュニケーションの中でお互いにとって良い形が作れていることにすごく感謝しています。

■地域との接点として大切な役割を担う農業

金田「現在のだんだんは事業が多様となってきたこともあり、要望があってもなかなか受けきれない部分もあるのですが、毎日市内の農家さんに伺って何かしら作業をさせていただいています。

和田「地域に貢献できる仕事ですごくいいなと思っています。農家さんは「今日も助かったよ」と声を掛けてくれるので私たちもやりがいがありますし、自分たちの携わった作物が直売所やスーパーに並んでいることがあったりすると余計に嬉しいんですよね。車で走っていて、このミカンの木は私たちが切ったよぬなんて話をしているとその地域に愛着も湧い

“笑顔”つなぐ

はままつの

ユニバーサル農業

株式会社ひなり (特例子会社)

中島 昌博



上：商品価値を落とさないよう正確な作業を求められることが、適度な緊張感を生む。
下：南区飯田町にある浜松事務所に、毎朝スタッフが集まる。

profile

1992年CRC総合研究所(現：伊藤忠テクノソリューションズ(株))入社。出光興産(株)のPOSシステム営業として主に新潟県・長野県の販売店店主への出光オンラインPOSシステム導入を担当。2011年からひなりに出向し、東京事務所と浜松事務所を管理。2016年4月から浜松事業所を担当する。

■特例子会社ひなりのはじまり

株式会社ひなりは、平成22年に設立し今年で6年目の特例子会社です。本社は東京にあり、親会社はIT系の伊藤忠テクノソリューションズ(株)という会社になります。特例子会社という聞きなれない方も多いと思いますが、日本では従業員50人以上を雇用する民間企業は障がい者を雇用する義務が法律で課せられていまして、現在の法定雇用率は2%(5年毎に見直し)となっています。これを満たすため、事業主が障がい者の雇用に特別の配慮をして設立した子会社が特例子会社と呼ばれます。

雇用率を達成するために、本社では親会社の清掃やマッサージなどの業務を請け負っていました。将来的なビジョンとして障がい

者スタッフの新たな職域を開拓していかなければいけないという課題がありました。そこで、色々な調査を経て農業分野に取り組んでいこうと浜松事業所を開設しました。この地域の障がい者をスタッフとして雇用し、市内の農家さんから収穫や定植、除草作業などを請け負うとともに、こうした連携農家さんの生産物や加工品を親会社とグループ会社に向けて販売する事業も行っています。

事業所の開設にあたり、この浜松を選んだ理由のひとつは、周年での農作業が見込めるためです。私たちはスタッフが正社員として雇用しますので、常に請け負わせていただく仕事が必要ではありません。他産地では季節的な作物が一般的である中、浜松では周年出荷している施設園芸がさかんです。市内全域で多種の農作物が作られているので、露地作物であっ

ても年間を通して何かしらお受けできる仕事があります。地域の農業者のみならず、福祉関係の方々との連携のもと、農作業の委託業務を行っているのがひなりのモデルです。

■企業として農作業委託を行う強み

現在、浜松近郊の8軒の農家さんと委託契約を結んでおり、3〜4チームに分かれて毎日農作業に伺っています。従業員数は26名で、障がい者スタッフが21名、そして障がい者を支援・管理する立場のサポートマネージャーと呼ばれる職員が5名おります。障がい者スタッフは、サポートマネージャーと一緒に農家さんへ伺い、農作業をさせていただきます。

農家さんにとっては収穫時期が特に人手の欲しい時期になります。ひなりではトマト、アスパラ、ミカン、ブルーベリーなどの収穫作業をさせていただいてますが、単に採れば良いというものではなく、農家さんの商品になりますので、一定以上の正確な作業が求められます。ですから、スタッフの

技術の育成も必要ですし、効率的な業務の管理も必要となります。また、仮に食品事故があつては農家さんに大変な迷惑がかかりますので衛生管理も非常に大切です。その他、労務災害などに対する安全管理なども企業としての責務です。こうした中、企業として農家さんからのオーダーにしっかりと応えていくことで、信頼関係を築いていくことができます。

農家さんほど労働力の不足が課題となっています。一方で、人を雇用することはなかなかハードルが高い。例えば、賃金を払う以外にも労務管理などが必要になりますし、労働力の需要が一定の時期に偏っていることが多いため、ひなりには必要な時に必要な業務をお願いできるという点が、非常に助かっていると聞いています。実際、連携農家さんではひなりの作業を見込んで規模拡大を進めているところも多く、それに伴ってひなりの人員増も必要になってきているのが現状です。農福連携とは、農業と福祉の連携です。障がいのある方の働きたいという思いと、労働力を必要としている農業。そこにわたしたち企業が入ることです。うまく補完ができ、三者の



左：親会社がIT企業である強みを活かし、請け負った業務は徹底的なデータ管理を行う。また、障がい者スタッフの体調管理についても、サポートマネージャー同士が連携してデータに落としこみ最適なケアを行う。
 右：ブロッコリーの除草とトマトの収穫作業を行う障がい者スタッフとサポートマネージャー



依頼のあった作業に合わせて1チーム3～5人編成で作業現場に向かう。チームとしての一体感も大切。



作業が終わり事務所に戻ったスタッフたちは業務日誌をつけるのが日課となっている

良い連携が生まれているのかなと感じています。

■大切な役割を担うサポートマネージャー

農家さんからの率直な感想として良くお聞きするのが、障がいのある方たちがこんなによく仕事をこなせると思っていなかったというお話です。もちろん、障がいの特性もありますので業務のスピードなどはそれぞれですが、みんな一生懸命取り組みますし作業によってはお互い3倍くらい早くこなすスタッフもいます。

新しい農作業を請けた場合は、私たちサポートマネージャーが農家さんから作業の手順を細かく聞き、画像を載せた「作業手順書」というものを作ってスタッフに指示をします。作業を見る化することで安心してみんな同じ作業をすることができずし、できないスタッフがいない場合には、技術のアドバイスをしたり、やりやすくなる道具を作ったりと工夫をします。サポートマネージャーの役割は、彼らができないことをできるように支援してあげることです。

一緒に作業をしながら気づいたことをケアしてあげることが大切で、農家さんにとっても、細かいオーダーを伝えられるサポートマネージャーの存在がとても大きいのです。

スタッフたちは本当によく働いてくれています。農作業に自信がついてきていますし、各々が責任感やモチベーションを持って取り組んでくれています。社内の雰囲気もとても良いので和気あいあいとしたコミュニケーションもとれていていきますし、業務に対する提案なども積極的に出してくれるので、働きやすい環境が色々と形になっていきます。もちろん私の立場としては人材管理の視点も持っていないといけないので、厳しいことを言わなければならない時もあります。家族のような気持ちでいつも仕事をさせてもらっています。

■企業ならではの役割をこれからも

今後も、企業に課せられる法定雇用率は上がっていくことがはっきりしていますので、親会社にとつ

て特例子会社の更なる職域の開拓が必要です。こうした中で、私たちは農業分野での雇用を増やしていきたいと思っています。企業としては、社会貢献(CSB)のひとつとして行っているもので、そうした意味でもこの地域の福祉と農業をつなぐ今の良い連携の役割を果たしていけるといいですね。

農家さんから、ひなりを頼りにして農業経営をしているという声は多いので、今以上にこうした声に応えていきたい気持ちはありますし、現場に携わる私たちとしては、ひなりの障がい者ス

タッフが農家さんに頼りにされ、はつらつと働いていることが嬉しいことです。幸いここは離職率が低く、馴染みのみんなが働いてくれています。農業が魅力なのか、ひなりという会社が魅力なのか、いずれにしてもひなりに入ってくれたと、そう感じてもらえる会社でありたいというのが私たちの想いです。